

平成22年度学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立七尾高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)		分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)	
1 学習習慣の確立と教科指導力の強化						
(1) 自主的・計画的な学習態度の育成に努め、平日の家庭学習3時間以上の割合90%以上を目指すとともに、休日学習の充実を図る。	① ホーム担任・教科担任による個人面談等を充実させ、自主的・計画的な学習の取組を指導する。	休日の学習について計画を立てて臨んでいるか A 計画を立て学習に臨んでいる B 半分程度は計画を立てて臨んでいる C 1/4程度は計画を立てて臨んでいる D 何を学習するか考えていない	A 20.5% B 47.2% C 18.1% D 14.2%	A+B=67.7% 昨年は「1週間を通じての学習の計画性」の調査でA+B=68.6%であった。中間評価よりも、Aは5.2%増、Dは5.7%減。計画を立てて休日学習に臨む生徒が増えている。 生徒ひとりひとりのテーマを明確にすることで課題意識を持たせ、生徒の主体性を育む。ホーム担任が面談を通して重点科目や学習テーマを明確にし、教科担任が個別指導を通して学習の方法をアドバイスする。		
	② ホーム担任・教科担任が連携して課題等の回収の徹底を図り、「生活実態調査」を利用して望ましい高校生活を実現する。	平日の家庭学習時間が、 A 平均4時間以上である B 平均3時間以上である C 平均2時間以上である D 平均2時間未満である	A 24.9% B 38.0% C 27.8% D 9.3%	A+B=62.9% 昨年同期よりも7.9%上昇している。学習が2時間未満の生徒は1割未満であり、学習習慣は定着してきている。 全体的な上昇を足がかりに学習習慣のできていない生徒に働きかけ、学校全体で勉強する雰囲気をつくる。		
	③ 週末を含めた学習計画の重要性をホーム担任・教科担任が指導する。	休日の家庭学習時間が、 A 平均6時間以上である B 平均5時間以上である C 平均4時間以上である D 平均4時間未満である	A 34.5% B 17.1% C 22.3% D 26.0%	A+B=51.6%であるが、Aは、1年34.2%、2年30.9%、3年91.6%で、2年生が第一回調査より16.4%改善している。 長期的なビジョンを持って学習するよう面談を行い、学習に対する意識を高める。学習会の開催など、学ぶ環境を整え参加を促すことで学習の意欲を高める。		
(2) 計画的・恒常的な授業研究を実施し、教師一人ひとりの教科指導力を強化することで、生徒の学びの質を向上させる。	研究授業・教科指導研究会等を実施し、各種研修に積極的に参加するとともに、「生徒による授業評価」を活用し教師個人だけでなく、教科全体で改善に取り組む。	本校の授業は、思考力を高めるための準備や工夫が、 A 十分されている B 2/3以上されている C 半数はされている D されているのはわずかである	A 32.1% B 47.2% C 18.5% D 2.1%	A+B=79.3%で昨年同期と変わらない。A評価は1年36.0%、2年28.2%、3年32.0%であり、2、3年生のA評価が上昇している。 この数値は生徒の学習意欲を反映していると考えられる。教師の授業改善を継続し、生徒に学習の意義やねらいを丁寧に説明することで、学習する意欲を高める。		
(3) 生徒の習熟度に応じた授業や課題の質・量を研究工夫することで全ての生徒に対応した有効な指導法を確立する。	① 学年内、教科内の連携を密にし、生徒の力を伸ばす適切な習熟度編成を行なう。 ② 教員各自及び教科が更なる習熟度授業の展開の仕方に工夫を凝らすとともに、習熟度別授業による生徒の学力の伸びを検証する。	本校の習熟度別授業は、 A 実力がつき満足している B おおむね実力がつき満足している C あまり満足していない D ほとんど満足していない 各教科で模試成績の伸びた生徒が A 80人以上である B 60人以上である C 40人以上である D 40人未満である	A 18.4% B 62.8% C 13.0% D 3.6%	2年生 3年生 国 A 国 A 数 A 数 A 英 A 英 A	A+B=81.2% 昨年同期より2.1%減少している。しかし、生徒のA評価は1年30.8%、2年12.2%、3年生22.5%。学校全体でも昨年同期より16.3%減少している。学校の取組が、生徒の満足につながっていない。 生徒のニーズを把握し、どのような授業が生徒の力をつけるのか、教員が自分の習熟度別授業の内容を考え直し、生徒の意欲と自立につながる教材と授業づくりに取り組む。 3年生では、国語94人、数学94人の生徒が全国偏差値を伸ばしている。2年生では国語141人、数学112人、英語127人の生徒が全国偏差値を伸ばしている。 3年で伸びが鈍る傾向がある。学習の理解の質を上げるよう、習熟度別指導の内容と方法を検証する。	
学校関係者評価委員会の評価	広範囲にわたるレベルの高い取組が行われており、成果を上げている。目的意識を持ち主体的に学習するよう、更に指導してほしい。					
評価結果を踏まえた今後の改善方針	考えることを重視した学習指導に取り組むとともに、個に応じた指導の研究を進める。 自己成長が実感できるよう、生徒の意欲を育て高める教材や課題づくりを進める。					

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
2 自主性の高揚と規範意識の向上				
(1) 学年会、生徒会などで組織的に取組み、自主性・自律性を備えた生徒を育成する。	① 登校指導、街頭指導、全校集会時の講話等を通して自主・自律の生活習慣の確立を図る。	本校の生活指導(服装・遅刻・無断欠席等に関する指導)は A 適切な指導を行っている B ある程度適切な指導を行っている C もう少し徹底して指導する必要がある D 全く適切な指導とはいえない	A 48.8% B 40.6% C 3.0% D 1.0%	A+B=89.4%で昨年同期より微増であるが、A評価は10%増で、大きく向上している。「規範意識向上プロジェクト」により規範意識を高める指導が理解され効果をあげている。 今後も「規範意識向上プロジェクト」による定期的な指導を継続する。
	② 生徒会の活動や部活動の状況を保護者に広報する。	学校公開や広報などによって生徒会や部活動の取組が A 十分知らされている B ある程度知らされている C あまり知らされていない D ほとんど知らされていない	A 25.3% B 63.9% C 4.6% D 0.6%	学校行事についての情報提供への満足度は、A+B=89.2%で昨年同期より1.1%増加している。しかしA評価は、目標の50%に達していない。 本校ホームページ上に情報を発信する。
	③ 部活動を通じて生徒の自主性・自律性を育む。	部活動を通して、進んで物事に取り組む姿勢が A 身についてきた B 十分とはいえないが、身についてきている C あまり身につけていない D 全く身につけていない	A 34.6% B 42.4% C 6.4% D 16.6%	昨年同期のAは29.9%であり、4.7%上昇している。またA+Bでも77.0%で4.7%増加しているが、A評価は目標の40%に達していない。 顧問が部活動を通じて自主性を養うとともに、計画やメニューを考えさせるなど部員の自主性・自律性を高める指導を行なう。
(2) 生徒と深く関わり人間としての「在り方生き方」を考えさせることで規範意識や帰属意識・共生意識を育成する。	① 学校行事の準備や後片付けに、ボランティアの意識を持って取り組ませるとともに、自ら進んで校内及び地域の美化に努める。	校内や地域のボランティアに A 自ら進んで取り組んでいる B ある程度取り組んでいる C あまり取り組んでいない D 全く取り組んでいない	A 8.5% B 37.4% C 32.4% D 21.5%	自ら進んで取り組む生徒は、5.1%から8.5%に増加している。またA+Bでは11.1%増加しており、部活単位での自主的ボランティアの取組成果が徐々に現れている。 部活単位でのボランティア清掃や奉仕活動を継続しつつ、来年はボランティア講座などによって生徒を啓蒙し意識改革を図る。
	② 生徒理解に関わる研修会に積極的に参加し、教員の資質向上に取り組む。	教育相談に関わる研修会 A 3回以上行った B 2回行った C 1回行った D 1回も行わなかった	A	6月、8月、9月に研修会を実施している。 今後も定期的に研修会を行い、教職員のカウンセリングマインドを向上させる。
学校関係者評価委員会の評価		部活動においては、生徒自身の成長によって上位に入ることができるよう、生徒の自主性と自律性を更に育ててほしい。		
評価結果を踏まえた今後の改善方策		学年会や生徒会などで取組み、自然なかたちで挨拶をする場面や、自主的に奉仕活動に参加する機会を設ける。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
3 キャリア教育の推進と自己実現能力の育成				
(1) 学校教育全体にキャリア教育を展開し、人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力などの生きる力を育成する。	教育活動全体を通じて、キャリア教育を推進し、挨拶する生徒を育成する。まず授業で、生徒がしっかり挨拶をできるようにする。	本校の先生は授業の開始・終了の挨拶指導を A 徹底している B だいたいしている C 時々している D あまりしていない	A 59.2% B 32.7% C 0.0% D 0.0%	A+B=91.9% 目標の80%を超えている。同じ内容の質問に対する生徒の評価はA+B=79.4%であり、十分とはいえない。 キャリア教育の一環であることを生徒に理解させ、挨拶が日常生活や学習の意欲につながるよう指導する。
(2) 高い進路目標を持たせ、進路実現を目指す態度を早期に育成する。	個人添削等の指導を継続、強化して受験に必要な学力をつけることで、生徒が希望する第一志望校に出願する。	出願した第一志望校に A 満足している B だいたい満足している C あまり満足していない D 全く満足していない	A 55.3% B 31.7% C 8.9% D 4.1%	2月、3年生にアンケート調査を実施。 A評価が目標の50%を超え、A+Bも87.0%と昨年より3.3%増加。第一志望に向けて生徒の学力を高める取組が、生徒に受け入れられている。 高い目標を持たせ、自己を向上させる取組を継続する。
(3) 3年間を見通した指導体制の構築・教員全員による組織的指導体制の強化を図り、生徒の習熟度に合わせた教材の開発・利用方法の研究を進める。	難関大学の問題解法研修会を各教科で実施し、教科指導力を高めるとともに、個別指導体制を整備して添削指導に当たる。	質問に的確に対応してくれる先生が、 A ほとんどである B 2/3以上いる C 半分はいる D 半分はいない	A 69.4% B 25.0% C 3.8% D 1.4%	A+B=94.4%であるがA評価が前期に比べて4.8%減少し、Dも0.8%増加している。トータルの数字は高いが、生徒が質問しにくい状況が出てきていることも考えられる。 学力差の広がりにつれて質問しづらい生徒が出てくることを想定の上、生徒への声かけなどの対応をおこない、生徒が質問しやすい雰囲気をつくる。
学校関係者評価委員会の評価		コミュニケーション能力の育成が、社会の一員となるための課題である。自己表現力を高める取組を、キャリア教育の目標として取組んでほしい。		
評価結果を踏まえた今後の改善方策		自己表現力を育成し、生徒が自ら考え、自ら目標を決め、自発的に努力するよう指導を行なう。 キャリア教育を進め、将来設計能力・目標実現能力・社会参画能力を育てる。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
4 特色ある教育活動とSSH事業による人材育成				
(1) 事象を科学的に探求する論理的な思考力と創造性・独創性や英語活用能力を育成し、国際的に活躍できる科学技術系人材の育成を目指す。	化学グランプリ、物理チャレンジ、生物チャレンジ、数学オリンピックなどに、積極的に参加し上位入賞を果たす力を身に付ける。	化学グランプリ、物理チャレンジ、生物チャレンジ、数学オリンピックなどで、入賞者が A 15名以上である B 10名以上である C 5名以上である D 5名未満である	D	化学グランプリ、物理チャレンジ、生物チャレンジの入賞者を出すことはできなかった。参加者数は化学49名、物理8名、生物38名、数学46名と多くの生徒がチャレンジし、活動の輪を広げている。 指導の充実を図るとともに、目標の達成度判断基準を見直す。
(2) 小中学生や地域にSSH事業を広報し、その成果を普及することによって本校理数科への理解を図る。	① SSH活動および成果を近隣の中学校・保護者等へ広報する。	近隣の中学校への広報活動の成果が、理数科体験入学者数の増加となり、昨年より A 20%増えた B 10%増えた C 5%増えた D 5%も増えなかった	A	昨年39名から本年度58名と48.7%増加している。 今後も、SSH通信やホームページを通じた広報活動を継続する。
	② 授業、教科研究会、学校行事および普通科向けのSSH事業を展開し、これまでの成果を全校的なものにする。	SSH事業の研究開発の成果が、全校に A 十分に還元されている B ある程度還元されている C 少ししか還元されていない D 還元されていない	A 40.8% B 55.1% C 4.1% D 0.0%	Aは第1回調査より6.1%増加している。昨年同期と比べて0.4%の微増である。 SSHの活動に啓発され、プレゼンテーションで発表する学習を望む生徒が普通科に出てきている。自分の考えを伝える活動を普通科に取り入れることで、SSHの研究活動の方法を全校に還元する。
学校関係者評価委員会の評価	科学グランプリの応募者は増えており、過去の入賞実績もある。今後も科学教育の振興に力を尽くしてほしい。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策	指導体制の充実を図るとともに、生徒の意欲関心を深める課題や教材を工夫する。 小中学生の理科教室やSSH研究の地域への広報など、科学を普及する活動をさらに進める。			

(注) 評価が「やや低い」「低い」ものについては、早急に改善策を検討する。